

「ぼくは、ピラミッドに出発するよ。じゃあね」ツバメは飛び去りました。一日中ツバメは飛び、夜になって町に着きました。「どこに、とまったらいいかな」と、ツバメは言いました。「とまれるようなところがあればいいんだけど」それからツバメは、高い柱の上のぞうを見ました。「あそこにとまることにしよう」と、声をあげました。「あれはいい場所だ、新せんな空気もたくさんすえるし」そして、ツバメは幸福の王子の両足の、ちょうど間に止まりました。「金のベッドルームだ」ツバメは、あたりを見まわしながら、そっと一人で言い、ねむろうとしました。ところが、頭をつばさの中に入れようとしたとたん、大きな水のつぶが、ツバメの上に落ちてきました。「何てふしぎなんだ」と、ツバメは大きな声をあげました。「空には雲一つなく、星はとてもくっきりと、かがやいているというのに、雨がふっているなんて。北ヨーロッパの天候は、まったくひどいもんだね」すると、もう一てき落ちてきました。「雨よけにならないんだったら、そうなんて、何の役にも立たないな」と、ツバメは言いました。「もっと、いいえんとつをさがさなくちゃ」ツバメは、飛び立とうと決心しました。でも、つばさを広げるよりも前に、三番目の水てきが落ちてきて、ツバメは上を見上げました。すると、何が見えたのでしょうか。幸福の王子の両目は、なみだでいっぱいになっていました。そして、そのなみだは、王子の金